



狩野芳崖筆『悲母観音』を用いた授業実践例

海城高等学校 横井成行

背景の淡い金色が画面いっぱい広がるなか、ひげを生やした観音が見おろす。その顔を下から見上げる、ふしぎな球体にくるまれた子供のまなざし。たがいの視線がかっちりと結びつくような構図が印象的な作品である。美術館などでのおき方にもよるが、この作品を下から見上げたときに、あまりの美しさや崇高な雰囲気自然と涙が出てきたという人もいるぐらいである。

そして、観音と童子という取り合わせでアジアの伝統的な仏教絵画の形式をふみながらも、色使いや、衣服・装飾品を微細にいていねいに描くことを通して、きわめて立体的で写実的な観音と童子のイメージと、それらが浮かんでいるように見える奥行きのある空間を表現することに成功している。そこには、とうとうと明治日本に流れ込む西洋画の画法に刺激されつつ、西洋画の技法研究や顔料をヨーロッパなどから輸入して使ってみるなどの努力を重ねて「日本画」(当時は「新画」とよばれた)をつくり出そうとした、幕末から明治にかけて生きた一人の「絵師」の才能と工夫が横たわっている。その「絵師」の名は、狩野芳崖。

父の長府藩(現在の山口県下関市)絵師・狩野晴皐せいこうの下で絵師としての素養をみがいた芳崖の作品は、近年、父の作品との比較からあらためて父の影響が大きかったことが注目されている。また、芳崖は父から学びつつ少年ながら「松隣」と名乗り、父の手法に独自の工夫を加えてより上質な絵画を描こうとする向上心をもっていた。工夫をこらす独創性をもつがゆえに、10代末～20代に江戸の木挽町狩野家のもとで修行していたとき、江戸城の修復に参加したおりに色の塗り方が狩野派の「伝統」を逸脱しているとかどで師にしかられたというエピソードが残る。

ところで、芳崖が生きた明治初期は、廃仏毀釈の嵐が吹き荒れ、極端な欧化主義に

はしる政府や世俗のなかで伝統的な絵画手法で描く在来絵師たちは片隅に追いやられた。芳崖も陶磁器の下絵かきで日銭をかせぐ一時期を過ごしたという。

だが、東洋美術を積極的に評価し西洋美術とならべて美術の本質を理解しようとしたフェノロサと出会ったのが転機となった。1882年の内国絵画共進会という官営展覧会に出された芳崖の作品にフェノロサが注目したのである。1884年以降、フェノロサが主宰し、西洋画や日本の古画の模倣ではない「日本画」(「新画」)の創出とその作家の育成を目的とする「鑑画会」に、もともと向上心に富む芳崖は活躍の場を得る。フェノロサが政府要人ともつながりをもって美術行政をつかさどる立場にあったことも大きいかもしれない。そのフェノロサ自身も、カトリックとイスラームあるいはヨーロッパとアフリカなどの多文化が交錯するスペインの港町マラガ生まれで音楽などの芸術に造詣の深かった父の影響で、多元的な価値観をもっていた。芳崖とフェノロサという二人の人物が、たがいに父親からの影響を強く受けていたという共通点は興味深い。

1888年、芳崖が逝去の直前まで筆をとった遺作が、本作品『悲母観音』である。この作品を通して、芳崖は狩野派の絵師として出発しながら、

年表	
1882～1887	井上馨外務卿(外務大臣)が主導し、欧化主義の「鹿鳴館外交」を展開するも、ノルマントン号事件が起き、外国人判事採用で破綻。
1887	大同団結運動。星亨ら、三大事件建白運動を進める。
1888	三宅雪嶺、雑誌『日本人』を創刊し国粹主義を標榜。
1889	大日本帝国憲法発布。陸羯南、新聞『日本』を創刊。
1890	教育に関する勅語(教育勅語)発布。
1891	内村鑑三、教育勅語奉読式にて不敬事件。
1892	久米邦武、論文「神道は祭天の古俗」が問題となり帝大教授を辞職。

▲表1 年表

美術としての日本絵画を、近代に橋渡ししたといっってよい。

さて、以上の背景説明のうえで、生徒に『悲母観音』を鑑賞させ、次の2点から質問を投げかけてみよう。

- ① 『悲母観音』が制作される1880年代後半はどのような政情や思潮だったか。
- ② 『悲母観音』は「理想的な母子関係の表象」と評価されるが、それにはどんな背景があるのだろうか。

生徒に『悲母観音』を見てもらって10分ほどが経過したところで、以下の発問を行う。

「さて、『悲母観音』の制作年代の1880年代後半というのは、政治・外交的にどんな時代だったかな？『年表』を見ながら気づいたことを言ってみよう。」

Aさん：制作年は大日本帝国憲法の発布の前年ですよね。だから、近代的な政治のしくみを整えようとしていた時代です。

Bさん：自由民権運動の最終段階で、前年には星亨らが進めた「大同団結運動」のなかで「三大事業建白運動」が起きていますね。

Dさん：つまり、政府が上から中央集権的な近代国家の形を整えようとするときに、下からも民衆が政府の進める政策に関して意見を反映させていこうとしていたために、この二つの動きがぶつかっていた時代だったことですね。

「ほう。Dさん、うまくまとめてくれたね。ところで、『政府の進める政策』というのは、うまくいっていたのかな。Bさんが指摘した『三大事業』の内容はどのようなものだったかな？」

Bさん：はい。地租の軽減、外交失策の回復、言論集会の自由の実現です。

「そうだね。そのうち、外交失策ということが、この作品の制作にも関係するんだけど類推できるかな。この前後には、雑誌や新聞を中心にどんな動きがあった？」

Aさん：井上馨が進めた「鹿鳴館外交」は不平等条約改正交渉の役にたらず失敗したので、かえって欧化主義に対する民衆の反発が強まりました。

Cさん：だから、国粹主義を唱える雑誌『日本人』や、国民主義を唱える新聞『日本』があいついで創刊されて、多くの人々の意識を高めていきました。

Dさん：つまり、外国にすり寄りすぎる井上外交に違和感をもっていた人々の反感が日本在来の文化や誇りに目を向けさせることになったってことですか。

「そのとおり。新聞や雑誌だけでなく、絵画などの芸術だって時代の思潮のなかでつくられていくからね。」

Bさん：そうか。だから芳崖は廃仏毀釈で無価値とされた仏教絵画に取り組んで日本絵画を変えようとしていったんだ。

Cさん：おまけにフェノロサも日本の在来芸術を評価していたからね。

「制作の背景がはっきりしてきたところで、作品の中身について考えてみようか。まず、『観音』の描かれ方について何か気づくことはないかな？」

Aさん：『悲母観音』っていうくらいだから、お母さんの顔にみえますよ。

Bさん：そうかな？口ひげが生えているし男なんじゃないか。

Cさん：それに、手にした木の枝みたいなものから、水がたれているよ。これは何だろう？

「はい。いいところに気づいていますよ。観音は、悩み苦しむ人々を救う仏として、さまざまな形で人々の前に姿を現すと信じられた。日本だけではなくアジアの仏画には好んで描かれてきた主題だ。この絵は、邪気をはらう柳の枝を使って水瓶の葉や水をまく『楊柳観音』の形をとっている。本来、観音には男女の性別はなく両性具有だ。画題にひかれてお母さんの顔に見えるというのはしかたないか。でも、観音が何を表しているかは大事なんだ。これを解くために、下の『童子』の描かれ方に注目してみるとどうかな？」

Bさん：子供が上の観音をみつめていて、水を飲もうとするのか、口を開けてますね。

Cさん：子供が球の中に包まれて立体感があり

ます。それに、お母さんのお腹の中の胎児にも見えるのでリアルです。

「そうだね。総合してみると、リアルな『子供』が母を表す『観音』が与える水を口に受けるという構図だね。だから慈愛に満ちた『理想的な母子関係』を表すとしてこの作品は評価されてきた。子供を生み、いつくしみ深く育てる『母』となる女性の生き方—いわゆる『賢母』を理想とする考えが、近代国家を築く過程で『常識』化するなかで生み出されてきた作品ともとれる。ただ、これまで考えてきたように、これを日本史の資料として、1880～1890年代の社会背景と重ねて一歩踏み込んで読み解いてみるとどうだろう。いくつかある学説の1つを紹介するね。ヒントを出すよ。戦前にいわれたことなんだけど、国民は『天皇の赤子』という表現があったんだが……」

Dさん：あっ。先生、少しみえてきました。この「観音」は天皇の表現でもあるのかもしれない。とすると、この子供は、国民を表しているのかな……。

Aさん：なるほど、「観音」が口ひげを生やした男性的な顔にも描かれている背景には、そういう理由がありそうですね。

Bさん：つまり、この絵自体は、当時の日本の社会がめざしていた、天皇の庇護の下にある国民という構図を表しているかと推測できそうですね。

「みんな、これまでとは違う面も発見したようだね。さっきも言ったように、芸術作品もそれをつくりだす芸術家が、その時代の社会や思潮の影響を受ける。当時の社会背景をもとに、作品を読み解いていくと新しい発見がありそうですね。」

Cさん：美術の時間にも見た絵なんだけど、日本史の時間にみんなで議論してみると、違う世界がみえてきた！

【参考文献】

- 千葉慶「狩野芳崖《悲母観音》を読む」（千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書『権力と視覚表象 Ⅲ』第67集，2003年）
José María,Cabeza Lainez
José Manuel,Almodóvar Melendo
‘Ernest Francisco Fenollosa and the quest for Japan. Findings of a life devoted to the Science of Art’
“Bulletin of Portuguese-Japanese Studies” núm9, December, 2004
荒井経・二宮修治「狩野芳崖遺品顔料の分析調査報告」（『東京学芸大学紀要』第5部門 芸術・健康・スポーツ科学56号，2004年）
千葉慶「戦争と悲母観音」（『IMAGE & GENDER』No.6，2006年）
石田智子「狩野芳崖の後期作品とフェノロサ」（関西大学『東アジア文化交渉研究』第5号，2012年）
関根佳織「狩野芳崖と父晴卓—作品比較と新出資料《松岡亀峰像》紹介—」（神戸大学『美術史論集』第15号，2015年）
竹下花「時代が求めた「日本画」—狩野芳崖筆《仁王捉鬼図》に見る鑑画会の理想」（『アジア近代美術研究会会報 しるば』No.4，2019年）